

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520040

研究課題名（和文）

清朝中国ムスリム学者劉智『天方性理』におけるミクロコスモスと世界認識

研究課題名（英文）A Chinese Muslim Thought on Microcosm/Universe: in the Case of Liu Zhi's *Tianfang Xingli* Written in the Early Qing Dynasty.

研究代表者

仁子 寿晴 (NIGO TOSHIHARU)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・特任准教授

研究者番号：10376519

研究成果の概要（和文）：

明末清初期は中国イスラームが漢文で自らを表現し始める時代である。そのなかで特に異彩を放つのが劉智（d.1730）の著した『天方性理』である。この書は中国思想、イスラーム思想のみならず、当時、中国に流入しつつあったイエズス会士の自然学を参照した形跡があり、科学史的な文脈を踏まえずしてその思想を掴めないところにその特異性がある。『天方性理』巻三および巻五を精読することにより、特に人体に関する新たな自然学的知見をもとに劉智が創出した中国思想ともイスラーム思想とも異なる独自の思想世界の構造をミクロコスモスと世界認識の観点から抽出するとともに、この特異な思想を生み出す諸種の背景を考察した。

研究成果の概要（英文）：

It is well known that during the end of the Ming Dynasty and the beginning of the Qing Dynasty Chinese Muslims abruptly started to express themselves in the form of books written in Chinese, the most conspicuous of which was *Tianfang Xingli* authored by Liu Zhi. Its idiosyncrasy consists in the fact that we can find not only elements of Chinese thought and Islamic thought but vestiges of new natural sciences flowing into contemporary China through the efforts of Jesuits, which make it difficult to understand the kernel of the work without cultural contexts history of science should meddle in. Focusing the books III and V of *Tianfan Xingli*, this research program tried to extract Liu Zhi's original thought world differing from those of Chinese and Islamic thought traditions, which was produced, in all likelihood, on the basis of some new findings concerns the human bodies, and to pick up some kinds of backdrops of his thought world and examine them in some degree.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成 21 年度	700,000	210,000	910,000
平成 22 年度	700,000	210,000	910,000
平成 23 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：宋学、イスラーム神秘思想、自然学、形而上学、身体論、存在論、理、性、唯心論、唯物論

## 1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦前の一時期、日本で精力的に中国ムスリム思想の研究がすすめたことがあったが、敗戦により短期間のうちに研究が途絶する。現時点から彼らの中国イスラーム思想研究を振り返ると、後に田坂興道の大著『中国における回教の伝来とその弘通』（1964）に結実するように基本的に中国ムスリムの歴史研究であって、中国思想およびイスラーム思想の双方の観点から中国ムスリム思想文献の内容を詳細に読み込む思想史的研究が欠けていた。

近年、われわれ日本の研究者が中国ムスリム思想文献を研究対象にするようになったのは、改革開放の進展著しい中国で回族出身の思想研究者たちが自らの思想的伝統を研究対象として研究成果を発表するようになったことが直接の原因である。1987年に中国ムスリムの漢文文献の写真版叢書が刊行され（寧夏少数民族古籍性理出版規劃小組『回族和中国伊斯蘭教古籍資料彙編』）、代表的な研究書として金宜久『中国伊斯蘭探秘』（1999）が、さらに劉智『天方性理』の現代中国語訳が馬宝光・李三勝両氏により刊行されている（刊行年代不明）。

中国の回族出身の研究者たちの研究は、たとえば中国イスラーム研究の第一人者である金宜久氏は劉智の思想内容に含まれるイスラーム的特徴をしばしば指摘するが、一般的なイスラーム理解の枠内での指摘にとどまるという憾みがある。その原因は、清初の中国に伝えられ、劉智が主に依拠したと思しいペルシア語・アラビア語思想文献への参照を欠き、同時にまた圧倒的な士大夫の言語文化としての朱子学的用語体系を劉智が使いこなしたことへの配慮が欠ける点に求められよう。劉智『天方性理』現代中国語訳も同様の欠陥を有する。

日本同様、ほぼ歴史研究に限定されていた欧米の研究動向も、近年、明末中国ムスリム王岱輿『清真大学』の英訳、MURATA Sachiko, *Chinese Gleams of Sufi Light* (2000)が刊行されるなど、中国イスラーム思想への注目が集まりつつある。

## 2. 研究の目的

中国イスラーム思想研究には従来の中国思想研究やイスラーム思想研究と異なり大きな壁がある。中国思想研究のディシプリン（特に文献のいかに読解するかディシプリン）とイスラーム思想研究のディシプリン（同じく読解のディシプリン）の間にある差異あるいはズレをどのように超克するかという問題を解決せずして、中国イスラーム思想研究がそもそも成り立たないからである。残念なことに従来の中国イスラーム思想研

究にこの視点が大きく欠落していたことは否めない。本課題はこの問題に留意しつつ、また言い換えるなら足がかりとしつつ、中国イスラーム思想に内在する思想的可能性を追求することを広義の目的とする。

このことを過去のわれわれの研究活動に即して敷衍しておきたい。本課題の研究グループは1999年に文部科学省科学研究費創成的基礎研究「現代イスラーム世界の動態的研究」で組織された劉智『天方性理』研究グループを母体とする。このときは、特に『天方性理』巻一（『天方性理』は全五巻）を対象に中国思想研究グループとイスラーム思想研究者グループの二つに分かれ、中国思想研究者が『天方性理』本文の訳注を作成し、イスラーム思想研究者が劉智の参照、翻訳したペルシア語やアラビア語文献の同定および引用箇所を特定し、清末の馬德新、馬聯元による『天方性理』アラビア語注釈と対照することにより、ペルシア語・アラビア語と漢語の語彙の対応関係を調査した。しかし、この試みは必ずしも成功したとは言えない。劉智による『天方性理』の用語法は通常考えられるイスラーム思想の用語法からも、中国思想文脈から見た場合の通常の漢文からも逸脱していたからである。

科学研究費基盤研究(C)「清朝ムスリム学者・劉智『天方性理』における中国思想とイスラーム神秘主義」（2004年度～2007年度）平成では、『天方性理』のなかで最も朱子学の語彙と発想が顕著であるとともにイスラーム神秘主義の色が濃い、人間の心を題材とする巻四と、朱子学の自然学を離れ、イエズス会士の自然学的知識を採り入れた自然学一般を論じる巻二を対象にし、『天方性理』のなかで中国思想の用語体系と発想がどの程度機能しているのかを考察した。この研究では以前の失敗に鑑み、中国思想研究者とイスラーム思想研究者が主従なく、訳注作成に関わり、中国思想研究とイスラーム思想研究の異なる二つの立場から入念な検討を加えた。その結果、『天方性理』巻二では、自然学的原理がたんに西方のイスラーム思想が「性」や「理」という漢語で表現されるのではなく、「性」や「理」などが持つ中国思想的文脈負荷性が利用され、最大限に意味を拡張しつつ、西方のイスラーム思想と接合していること、また逆に西方イスラーム思想の可塑性もまた中国思想的文脈により最大限に発揮されていることが判明した。つまり、『天方性理』には中国思想的要素とイスラーム思想的要素が弁別できず、それと特定できないかたちで融合する側面が少なからずある。そこに中国イスラーム独自の、西方イスラーム世界の思想や中国の伝統的思考法の双方と異なる思想が立ち現われくる可能性を見出

すことができる。

加えて、マテオ・リッチ『乾坤体義』からの明らかな引用が見られるなど巻二の自然科学にはイエズス会士が中国に持ち込んだ自然科学的知見が散見される。これも西方イスラーム思想や中国伝統思想がそのまま『天方性理』で表現されない理由の一つとなる。巻四に見える「聖人」論では中国伝統思想で言われる「学至聖人」の考え方が、「聖人」=預言者と捉え直される。この際、劉智は中国思想にもイスラーム思想にも回収されない、主体的な「自由」という概念を導入する。イエズス会士の知見の流入とそれに伴う中国思想体系の動揺および、中国イスラーム思想における中国思想と西方イスラーム思想の相克相即がそこに影響を及ぼしているものと思われる。

上記、研究グループの研究の道程、そこで蓄積された研究成果より、『天方性理』中に含まれる、一見、中国思想的要素、イスラーム思想的要素と思われるものも、中国思想研究者とイスラーム思想研究者双方の視点から綿密に考察することにより、劉智独自の思想を取り出す必要があることが十分に察知されよう。このことは『天方性理』をはじめとする劉智の著作のみならず、他の中国ムスリム著作を考察する際にもきわめて重要な視点を提供しうる。

本研究課題「清朝中国ムスリム学者『天方性理』におけるマイクロコスモスと世界認識」はわれわれの研究グループの研究により次第に浮上してきた広義の目的を有しつつ、本課題固有の狭義の目的ももつ。これまでの研究で、全五巻からなる『天方性理』のうち、巻一、巻二、巻四の精読、訳文作成、訳注・解説作成を行ってきた。本研究課題では残る巻三（マイクロコスモスたる人体に関する自然科学的思考）、巻五（マイクロコスモスとマクロコスモスの同時把握）を主な研究対象とし、これまでと同様に訳文作成、訳注・解説作成を行いつつ緻密な考察を加えることで『天方性理』の核心に迫ることを目的とする。

『天方性理』の構成を簡単にまとめるならば、巻一はマクロコスモス生成論（創造論）、巻二はマクロコスモス各論（大世界の自然科学）、巻三はマイクロコスモス生成論（小世界の自然科学、身体論）、巻四はマイクロコスモス各論（心を中心とした身体論）、巻五は大世界と小世界の相即を論ずる。一見したところ、大世界に係る巻一と巻二、小世界に係る巻三と巻四が対になり、全体を巻五が包摂することも考えられるが、この書はそれほど単純な書物ではない。巻三は巻一および巻二と平行で相反する構造を持ち（マクロコスモス／マイクロコスモス）、かつ巻一、巻二をまとめる役割も果たす。巻五は巻四の心論の展開で

あるとともに巻一から巻四までの総括でもある（マクロコスモス＝マイクロコスモス）。つまり、巻三と巻五は二つの異なる意味で『天方性理』をまとめる役割を果たすのである。

この構造を念頭に置かなければ、巻三と巻五を精読することは、これまで検討を重ねてきた巻一、巻二、巻四を全体の構造から見返し、これまで公表してきた巻一、巻二、巻四各巻の訳・注・解釈を点検することができる。これが本研究課題固有の第二の目的である。

### 3. 研究の方法

本研究課題の目的を果たすために、劉智『天方性理』、また広く明末清初の回儒文献群を取り巻く状況を押さえておく必要がある。研究グループの過去の研究成果を踏まえて、以下の諸点に留意し本研究課題を遂行した。

- (a) 回儒文献群の著述、流通を可能にさせた明清回民社会
- (b) 回儒文献群の直接のソースとなった西方イスラーム世界のアラビア語・ペルシア語著作を回民社会に伝達した西方イスラーム世界と中国回民社会との関係
- (c) 回儒文献群の直接のソースである西方イスラーム世界のアラビア語・ペルシア語著作の西方イスラーム世界での位置づけ
- (d) 明末清初にイエズス会士が中国に持ち込んだ自然科学の知見および漢文イエズス会士文献の流通
- (e) (d)に対する中国思想体系の反応およびそれに伴う思想体系の変質。例えば掲暄や游芸による西洋自然科学の朱子学的解釈
- (f) 後の世代の中国ムスリムへの回儒文献群の影響

これらの視点を確保しつつ、『天方性理』を精読することは、この一つの書を読み解くにとどまらず、回儒文献群が中国社会、回族社会において何を意味していたのかを探究する際の礎となろう。(a)から(f)までの視点を確保するために、本研究課題では中国哲学研究、科学史研究、回民社会史研究、イスラーム哲学研究、イスラーム神秘主義研究の研究者を揃え、『天方性理』巻三、巻五の精読、訳文作成、訳注・解説作成に臨んだ。

各年次の作業行程は以下の通りである。

2008年度：研究会4回、研究合宿（二泊三日）4回を実施した。当該年度はマイクロコスモスたる人間の生成を対象とする巻三後半各図説をそれぞれ精読し、巻三前半も含め総合的に検討し、訳注および解説の思索を行った。

2009 年度：研究会 5 回、研究合宿（二泊三日）3 回、訳注編集作業を 1 回行った。この年度はマイクロコスモスたる人間／マクロコスモスたる世界の区別を超える地平を論じる巻五を精読し、その構造把握に努め、訳注・解説を試作した。それとともに『天方性理』およびそれを取り巻く中国イスラームに関して、研究代表者、研究分担者、連携研究者が各自研究していたものを堀池信夫編『中国のイスラーム思想と文化』（勉誠出版）上で発表した。

2010 年度：研究会 9 回、研究会合宿 3 回（うち一泊二日が 2 回、二泊三日が 1 回）、訳注編集会議 1 回を実施した。当該年度は前年度に積み残した巻五の図説を精読し、その後、成果公開に向けて 2008 年度に試作した巻三の訳・注の手直しに着手した。訳と注に関してはほぼ『中国イスラーム思想研究』誌上で公表できるかたちに仕上がった。

2011 年度：研究会 4 回、研究会合宿 5 回（うち一泊二日が 3 回、二泊三日が 2 回）を実施した。『中国イスラーム思想研究』第 4 号を編集し、誌上で訳・注・解説を公開するにあたり、『天方性理』巻三の前半（「身」を主題とする自然学）および後半（「性」を主題とする自然学）を巻一（マクロコスモスの生成を主題とする）、巻五と対照させつつ再検討した。

#### 4. 研究成果

「研究の目的」で述べたように、本研究課題の大きな目的は、劉智『天方性理』を包括する視点を有する巻三と巻五をこれまでの研究成果をもとに精読することで、『天方性理』の特異性を抽出することであった。研究成果の一部を利用しながら必要な程度まとめておく。

『天方性理』では巻三で描かれるマイクロコスモスが巻一、巻二で描かれるマクロコスモスと対照される。このときマイクロコスモス（小世界）はマクロコスモス（大世界）と反対（「逆」）であると規定されるが、完全に反対ではないことに通常のマクロコスモス／マイクロコスモスの対比との違いを見出すことができる。結論を述べるならば、このマイクロコスモス／マクロコスモスのずれゆえに巻三で『天方性理』は完結せず、最終的な統合機能を巻五に委ねることになる。ではなぜマイクロコスモス／マクロコスモスは完全に相反関係にならないのか。ここに大きな問題がある。

巻三の大きなソースとしてイブン・アラビーより若干後の時代のアズィーズ・ナサフィー（d. after 1280）によるペルシア語文献 *Maqsad-e Aqsa* が既に知られるが、それ以外

に鄧玉函（Terrentius, d.1630）『人身説概』、艾儒略（Aleni, d.1649）『性学粗述』などのイエズス会士自然学文献（『性学粗述』の一部に靈魂論が含まれる）を参考にしつつ神経概念（劉智の用語によれば「筋絡」）を導入する。この神経概念により、脳が神経による情報伝達を通じて身体を支配するという構造がはじめて生まれる。劉智の言によれば、脳は神経を通じて心（心臓）をも支配する。

この脳および神経に該当する機能を果たすものはマクロコスモスに存在しない。劉智はここにマイクロコスモス／マクロコスモス対比のずれを見出すのである。このずれは最終的に巻五におけるマイクロコスモスとマクロコスモスの融合により解消されるわけだが、それ以外にも劉智の思想世界ではきわめて大きな意味を持つ。大世界たるマクロコスモスはいわば機械論的世界であり、そこに恣意性は存在しないが、マイクロコスモスでは、本来ならば心（心臓）が身体を支配すべきなのに、脳という強力な機能をもった臓器により身体が支配される可能性が生じる。つまり人間の側にはマクロコスモスに存在しない「心にかかれぬ自由」があることになる。この構造が劉智の人間観に大きな影響を与えているのである。

この構造をもとにした劉智におけるマクロコスモスと世界認識の分析は、本研究課題により発行された雑誌『中国イスラーム思想研究』所収「訳注 天方性理 巻三その一」で詳細に解説した。

以上、説明したのは本研究課題における成果の例を挙げておいた。本研究課題の遂行により、「訳注 天方性理 巻三その一」以外に「訳注 天方性理 巻三その二」「訳注 天方性理 巻五その一」「訳注 天方性理 巻五その二」の公表の準備がほぼ整ったので、2012 年度以降順次『中国イスラーム思想研究』誌上に掲載していきたい。

なお、「研究の方法」欄で述べた (a)～(f) の視点を取り入れた研究は、『天方性理』の訳注以外に、堀池信夫編『中国のイスラーム思想と文化』（勉誠出版、2010 年 1 月）などで研究代表者、分担者、連携研究者各自の研究として発表された。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

①青木 隆・佐藤 実・中西 竜也・仁子 寿晴・矢島 洋一「訳注 天方性理 巻三その一」『中国イスラーム思想研究』第 4 号（2012 年 3 月）11-285 頁

②YAJIMA Yoichi, “The Spread of the Kubrawiya,” Bakhtiyar BABADJANOV & KAWAHARA Yayoi (eds.), *History and Culture*

of Central Asia, Tokyo: TIAS, The University of Tokyo, 2012.3, pp. 229-240

③佐藤 実「イスラームにむけられた疑いを解くこと——金天柱『清真積疑』初探」堀池信夫編『知のユーラシア』（明治書院、2011年8月）176-194頁

④矢島 洋一「非アラビア文字表記新ペルシア語」近藤信彰（編）『ペルシア語文化圏史研究の最前線』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2011年6月30日、13-30頁

⑤仁子 寿晴・小林 春夫「イブン・スィーナ著『治癒』形而上学訳注（第一巻第一章および第二章）」『イスラーム地域研究ジャーナル』3号（2011年3月）73-117頁

⑥仁子 寿晴「イブン・スィーナ『治癒の書』形而上学の構造——最高概念の把握と学問構造——」小林春夫・阿久津正幸・仁子寿晴・野元晋（編）『イスラームにおける知の構造と変容——思想史・科学史・社会史の観点から——』早稲田大学イスラーム地域研究機構（2011年3月）93-111頁

⑦矢島 洋一「元朝期東アジアのスーフィズム」堀池信夫編『中国のイスラーム思想と文化』（勉誠出版、2010年1月）81-90頁

⑧仁子 寿晴「中国思想とイスラーム思想の境界線——劉智の「有」論」堀池信夫編『中国のイスラーム思想と文化』（勉誠出版、2010年1月）61-80頁

⑨青木 隆「李贄——思想言語を獲得したムスリム知識人」堀池信夫編『中国のイスラーム思想と文化』（勉誠出版、2010年1月）45-60頁

⑩佐藤 実「イスラームと儒教の距離——中国イスラームの思想と歴史、王岱輿、馬注、劉智」堀池信夫編『中国のイスラーム思想と文化』（勉誠出版、2010年1月）31-44頁

⑪黒岩 高「中国ムスリム・コミュニティの形成と多様性」堀池信夫編『中国のイスラーム思想と文化』（勉誠出版、2010年1月）19-30頁

⑫佐藤 実「近世における中国イスラーム漢籍の出版」『民族紛争の背景に関する地政学的研究』第8巻（2009年9月）142-152頁

⑬黒岩 高「清代ムスリム・コミュニティの宗教的秩序を担うもの——経師とアホン」『民族紛争の背景に関する地政学的研究』第8巻（2009年8月）153-161頁

⑭矢島 洋一「ペルシア語文化圏におけるスーフィー文献著述言語の変遷とその意義」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界——もう一つのユーラシア史』（北海道大学出版会、2009年6月）67-95頁

⑮佐藤 実「近世における中国ムスリムの初等教育——『天方三字経』初探」『東アジア文化交渉研究』第2巻（2009年3月）233-244頁

⑯佐藤 実「劉智『天方典禮』と朱熹『家礼』——中国イスラームの婚礼と喪礼について」吾妻重二、二階堂善弘編『東アジアの儀礼と宗教』（雄松堂出版、2008年8月）283-311頁

〔学会発表〕（計8件）

①青木 隆「清朝中国ムスリム・劉智の小世界と大世界」国際日本文化研究センター・共同研究会「心身／身心と環境の哲学——東アジアの伝統的観念の再検討とその普遍化の試み」、於国際日本文化研究センター、2011年9月24日

②仁子 寿晴「哲学史の形成——イスラーム思想史の一断面」同志社大学神学部公開講演会、於同志社大学、2011年7月30日

③佐藤 実「中国イスラームの「釈疑」——布教とは別のありかた——」阪神中哲談話会第388回例会、於茨木市市民会館、2010年10月

④佐藤 実「中国ムスリムの脳に対する考え方——劉智を中心に」第25回東洋大学中国学会、於東洋大学、2010年7月

⑤黒岩 高「経師」と「回儒」——片思いの中華的ムスリム知識人たち」平成20年度九州史学会、於九州大学、2009年12月14日

⑥YAJIMA Yoichi, “Persian Sufism in East Asia during the Yuan Period,” *The Formation of Perso-Islamic Culture: The Mongol Period and Beyond*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, March 1, 2009

⑦佐藤 実「イスラーム漢籍における用語の変化について」関西大学文化交渉学教育研究拠点・第一回次世代学術フォーラム「境界面における文化の再生産」、於関西大学、2008年12月13日。

⑧青木 隆「中国とイスラームの間で——回民の思想」東洋大学中国学会第21回発表大会、於東洋大学、2008年7月19日。

〔図書〕（計2件）

①中国伊斯蘭思想研究会（本研究課題研究グループ）『中国伊斯蘭思想研究』第4号、2012年3月、322頁

②佐藤 実『劉智の自然学』汲古書院、2008年8月、386頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

仁子 寿晴 (NIGO TOSHIHARU)

京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・特任准教授

研究者番号：10376517

### (2) 研究分担者

黒岩 高 (KUROIWA TAKASHI)

武蔵大学・人文学部・准教授

研究者番号：60409365

佐藤 実 (KUROIWA TAKASHI)

大妻女子大学・比較文化学部・助教

研究者番号：70447641

青木 隆 (AOKI TAKASHI)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：20349947

### (3) 連携研究者

矢島 洋一 (YAJIMA YOICHI)

京都外国語大学非常勤講師

研究者番号：60410990